

2021「新港の森 四季の観察会」第4回

1. 目的 新港の森を、四季を通じて観察し、樹木の名前を覚えるだけでなく樹木のパワーについて学び、人と樹木、生活と樹木のかかわり、生態系における役割など樹木全体の理解を深める。

新港の森は人の手によってつくられた公園、樹木も人が植えたものということを踏まえてここならではの話題を解説する。

2. 日時 令和3年12月4日(土) 雨

3. 参加者 25名

4. 講師 樹木医 佐伯 肇

5. 開催者・事務局 新港の森管理事務所 筒井 所長
同上 西尾 氏



6. テーマ 「松の不思議」

7. 解説の実施内容 (解説順に記載)

- 冒頭・・・ 人工の森である「新港の森」がどんな風に育っていくのかを見ていくことを方針としています。元々、住宅と工場地帯の間の緩衝地帯(グリーンベルト)としての役割を担っていますが、地理的に「新港の森」が海岸に近いので潮に強いクロマツが多く植えられています。公園内にたくさんあるこのクロマツに焦点をあてて解説を進めます。
- 松の種類・・・ 日本に生育する松のほとんどは「アカマツ」「クロマツ」に代表されます。その違いは、次の通りです。

	アカマツ	クロマツ
生息地	海岸	山地
木肌	赤褐色	黒褐色
葉先の感触	痛い	痛くない
冬芽	赤っぽい	白っぽい

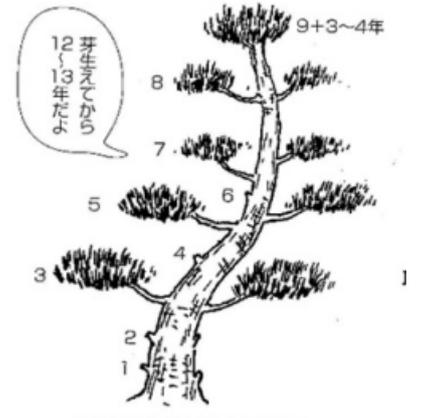
例外的に、都市公園ではアカマツとクロマツの両方がそろっている所があります。高岡古城公園です。

- 樹形・・・・・・・・ マツはグニャグニャらせん状に伸びます。対して、ヒマラヤスギはれっきとしたマツの仲間ですが真っ直ぐに伸びます。

松の新芽は、枝先から3方向に伸びています。ここで、右・左・直を選択して剪定すると好みの樹形を作ることが出来ます。この特性を利用したのが盆栽です。

人間の身勝手という見方も出来ますが、松は非常に丈夫な樹木で刈込にも耐え、寿命も長いので不老長寿に例えられます。

一般的に樹齢は年輪を見るのですが、松の場合この枝ぶりで樹齢が分かります。(右の絵を参照)



- マツタケ・・・・・・・・ アカマツ林のよく手入れが行き届いた所で獲れます。落ち葉や枯れ枝が溜まる場所では、富栄養の常態になりマツタケは出来ません。

アカマツとマツタケは共にやせた土地に育ちます。マツタケは菌根菌と言ひ、木の根からの養分吸収を助け、アカマツは光合成で得た糖を与える共生関係にあります。

一方、クロマツ林ではマツタケではなく松露(しょうろ)が獲れます。あまり馴染みがない代物ですが、トリュフのことを別名、西洋松露と言うそうで、このトリュフを思い起こすとイメージし易いです。



小さなジャガイモのような松露

- 松の葉・・・・・・・・ 葉っぱの数と断面

ヒマラヤスギ	1葉	三角形もしくは円
クロマツ・アカマツ	2葉	細長い円柱を二つに割った半円形
ダイオウショウ(北米)	3葉	円の中心から 1/3、120度で縦に三つ切り
ゴヨウマツ	5葉	円の中心から 72度の角度で五つに切り分け

汎用性の高い「松の葉」

「松の葉」とは、松の葉に包むほどわずかであることから「ほんのささやかな」手土産を贈る際に、のし紙として用いられます。

寸志は、上から目下の方に贈る一方向で用いますが、「松の葉」は双方向で使えます。知っているとな役に立ちそうです。



- 松の歴史・・・ 日本人は松が好きです。

正月の門松に始まって、盆栽や浮世絵、日本三景（松島・安芸の宮島・天の橋立）など、いつも日本人と密接な関係性を保ってきました。

歴史的には松と日本人の付き合いは6世紀後半からのようです。生活の変化に応じてカシなどの照葉樹林からアカマツに大きく転換した時期ですが、マツと人との最初の本格的な接点は、火力の強いマツ材を燃料として使うことにありました。しかし、やせ地でも生育する丈夫なマツは、収奪を繰り返す困難にもめげずマツの景観を維持してきました。

松と言えば風光明媚な「日本三景」ですが、時代とともにその姿も変容しています。

- ・ 天橋立 今も健全な細長い松林
- ・ 安芸の「宮島」 松はもみじに変化(マツクイ虫の被害によるものです)
- ・ 陸奥の「松島」 東日本大震災で被害、残った松もマツクイ虫の被害に

- マツ枯れ・・・ 奥山の松林が真っ赤に染まる松枯れの原因はマツクイム虫？

直接の犯人は材線虫で、この線虫を運ぶのがマダラカミキリ(共犯)です。線虫は明治時代に北米から持ち込まれたもので、マツ林は崩壊の危機に直面しています。松枯れ対策として薬剤が効果的ですが、非常に高価なため限定的とならざるを得ないのが実情です。兼六園のように“絶対に枯らさない”とい信念の元、松枯れの対策を講じているところもありますが、厳しい状況には変わりありません。

人の手によって増やされてきたマツが人の手によって滅ぶ、なんていうのはあまりにも皮肉としか言いようがありません。

松枯れには葉っぱがマダラに赤っぽくなる「赤斑葉枯病」(せきはんはがれびょう)もあります。菌類のカビの仲間が、葉に入り込んで繁殖し、葉を枯らしてしまう病気で、この落ち葉を堆肥代わりに放置すると病気が蔓延してしまうので焼却処分が必須となります。

- 松竹梅・・・ 「めでたい」の象徴となった年代の順番を表しています。

「松」 平安時代に吉祥の象徴

「竹」 室町時代より子孫繁栄の象徴

「梅」 江戸時代より反映・気高さ・長寿の象徴

それぞれが吉祥の象徴であることから本来、優劣関係はありませんが、吉祥とされた時代にしたがって、現代では格付けとして用いられています。

- しめ縄・・・ わらは米を収穫した後のわらではなく、青々とした稲を乾燥させたものが良いとされます。

神事におけるしめ縄は左廻（な）いで縄を廻（な）います。左は神聖、右は俗世、とする考えによるものです。

但し、出雲大社のしめ縄は、左右が逆の右廻いになっています。一方、お参りは御本殿周辺の垣を左回りに進んで、各御社殿を回ります。左右を使い分けているようで、左右のこだわりはあまりないようです。



しめ縄

右上の写真は観察会の会場に展示されたしめ縄です。佐伯樹木医が自身で廻われたもので、縄を廻う実演も披露されました。最後に、希望者のじゃんけんによる選抜で提供と相成りました。

8. 反省、感想など

今回は松を主とした観察会の予定でしたが、あいにくの土砂降りの雨だったため、野球場バックネット裏の屋内での開催となりました。12月の寒い雨模様の中での観察会、屋内での開催は正解でした。はからずも、観察会が天候に影響されないことを証明してしまいました。

さらには、このような悪天候にも関わらずたくさんの参加者に集まって頂き、盛況のうちに終わることが出来ました。

ところで、松とは関係ない“しめ縄”も正月の縁起物と捉えると、“門松”と並んで定番です。遠からず松と繋がりました。しかも、佐伯樹木医によるしめ縄を廻う（なう）実演に至っては、商品化が可能とか、次年度でのワークショップ開催の要望等が沸き起こるなど大盛り上がりでした。

松限定の観察会と言いながらも尽きない話題が、参加者の皆さんの興味を十分引き付けられたのではないのでしょうか。今後も、このように具体的な要望が湧き出るような観察会としたいものです。

以 上

(記録 村井 邦雄)